

図画工作科部会

司会者 吉野 法行（旭川市立旭川第二中学校教諭）

助言者 工藤 朝博（士別市立多寄中学校）

吉中 博道（士別市立多寄小学校）

I 授業の部会から ※主なものを抜粋

試しの活動について

- 試しの活動を通して、自分の思ったことをしてよいという活動の見通しをもつことができていた。自由に想像してよいということや活動の多様性を試しの活動で確認することができていた。
- 試しの活動で作った作品を壁に貼ったり、造形的な視点を言葉にしたものを黒板に貼ったりしたことで前回の活動が想起されていた。ただの言葉ではなく児童の体感として前時の経験が生かされていた。
- 躊躇なく、全員が一気に活動をスタートさせる姿が見られた。児童の思いが十分に広がり、表現活動へと転化するための手立てとして、試しの活動があったと思う。
- 材料をあえて制限することで、見立てる活動に向けた視点が出てきた。「同じだけど違う」→「なぜなのか」→「造形的な視点」→「見立て」につながっていた。
- 造形的な視点を表した言葉の選び方が、1年生に対して適切だったか疑問が残る。「配置」という言葉や、そもそも「見立て」という言葉が難しく、通じていない児童もいたのではないかと思う。絵や図、「くるん」「がしん」などの音のキーワードの方が分かりやすいのではないか。児童から出てきた言葉を使ったということだったが、児童の発達段階に合わせた言葉選びを工夫することもできると感じた。
- 造形的な視点を児童の中から拾えるかどうか大切である。「目に映っているけれど見えていない」児童もいる。それをいかに拾い上げ、児童が自覚していないことを言葉にできるかが大切である。

評価について

- 評価をするためには児童のつぶやきをメモしておくことが大切である。児童自身が振り返りなどを文章として残していくことはまだ発達段階的に難しいため、児童に話させることが大切である。単元を通して観察するとよい。
- 出来上がった作品から評価をすることはできない。作品をつくる過程で評価をする。また、1時間の中で全員を評価しきることが大切。録画やメモをしてリアルタイムで子供の活動を残すことが評価する上で必要である。
- 児童の発想の仕方をトレースしてみると何か見えてくるかもしれない。例えば、ストーリーから、形から、色から、材料からなど発想の仕方を知ることによって、児童の活動に対する評価やより有効な手立て、言葉掛けなどが考えられるのではないか。

授業の構成について

- 始まる前の児童の期待感や、早くしたくてたまらないという意欲が爆発していた。図画工作科が目指す姿の一つだと思う。
- クイズで見付けたお気に入りの形を使っていたことから、クイズが発想を膨らませる手立てになっていたと感じた。
- 偶然できた形に、友達同士で「これは〇〇じゃない？」と話し合う場面が見られ、よい活動だと思った。

II 助言者からの講評 ※要点のみ

(1) 工藤 朝博 校長から

小学生への指導技術への助言ではなく、図工の授業をする先生方に義務教育における図画工作の役割について考えてもらいたいという観点で話をする。図工・美術全体に関わる教師として、「先生、美術って苦手なんだけど、やらないとだめ？何か役に立つの？」という児童生徒の問いに対し、「そりゃあだめだろう、美術はね、〇〇のために学ぶんだよ。」という答えを一人一人がもつことが大切である。

ある版画家はこの問いに対して、「もしこの教室から色がなくなったらどう思う？形がなくなったら？」「教科書から写真がなくなったら？」と問い返し、「私たちの生活はどれだけ殺風景で、味気ないものになってしまうのか。」を考えさせている。美術とは生活から派生しているものであり、自分たちにとって役立つものであるということを伝えたのである。

教育とは、「文化」を伝達し、「文化」の学習を促すと同時に、学習した「文化」を基礎にして新しい「文化」を創造し社会発展の担い手になっていく営みのことであるとされている。図画工作の目標は生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することである。図画工作が教育の中で担う役割は非常に重要なものである。私たち図工・美術を教える教員は、図工・美術が生きていくために大切だということを訴え、色や形は私たちの生き方につながっていることを教えなければならない。自分の教科に対する信念をもち、子供の教育のためにどんな役割あるのかを考えて授業をしていく必要がある。

「労作せよ」という言葉がある。沈黙と集中から美は生まれる。一生懸命にするとということがとても大切である。また、教師も自分たちもかいて、つくって伝えていけるとよい。



(2) 吉中 博道 校長から

造形教育で培われる力とは何かを考えたとき、「ブリコラージュ」と「エンジニアリング」をつなぐのが図工であると考えられる。「ブリコラージュ」とは、素材や技術の思いもかけない新領域への適用や限られたリソースを駆使して高い付加価値を有するものをつくり出すことで、人類が古くからもっている知であり、「エンジニアリング」（近代以降の栽培された思考）と対比されるものである。

図工ではこうかきたい、つくりたいというものがあつたら「自由に道具を使える」ということと、「目の前にあるものを使って何かをつくる」という活動がある。今日の授業では、使える紙の種類をどうするか、色はどうするか、どこまで自由にやらせるかということを考えた授業づくりを行った。また、台紙を選ばせるか選ばせないか、今回ねらった活動をさせるためにはどのような環境を整えるべきか考えた。使える紙の種類を制限し不自由なものから発想を広げてつくることが意識した授業が行われていたが、きつい制限の下でも多様なものが生まれてくる。こうした限られたものを使って発想の訓練、経験を低学年で積ませることが大切である。

